

東京都図書館協会（TLA）令和6年度講演会講演録

テーマ：「大都市における地域資料サービスの未来」

講師：福島幸宏氏（慶應義塾大学文学部図書館・情報学専攻准教授）

令和6年8月29日（木）東京都立中央図書館において開催された当協会講演会を再構成してまとめたものです。

挿入スライドは、配布資料として別途HPで公開しています（令和7年7月25日現在）。詳しくはそちらを御覧ください。

福島幸宏です。どうぞよろしくお願いいたします。慶應義塾大学で図書館・情報学専攻の准教授をしております。



僕は高知で生まれ育ちまして、学生・院生時代は日本近現代史を専攻していました。その後、京都府の職員として、重要文化財である京都府行政文書の管理運用だとか、戦時期・戦後の行政文書の公開だとか、国宝の東寺百合文書（とうじひゃくごうもんじょ）のウェブ公開とかを担当しました。京都府立図書館では、都道府県横断検索システムにカーリルの UnitradAPI を最初に導入したチームの1人です。ともかく図書館関係の現場にはいたことになります。

こんなことを現場でやってますと、何かデジタルアーカイブできるでしょということになって、いつの間にか全国の大学図書館システムのこれからを考える、「これからの学術情報システム構築検討委員会」とか、博物館方面では、博物館法が変わりましたんで、それに対応する博物館 DX に関するワーキングとかに参加しています。今は知識情報基盤とか、デジタルアーカイブとか、MLA 連携とかを考えているというこ

とになります。

ずっと関西でして、東京にはまだまだ不慣れです。ようやく去年ぐらいから、迷わずに地下鉄に乗れるようになりました。今日も、スマホとかむっちゃ見ながら来ました。よろしくお願いします。

本日の構成

- ・1 情報通信環境の変化
- ・2 地域資料の捉え方
- ・3 東京という巨大都市
- ・4 おわりに

さて、本日の中身ですけれども、広報資料に「情報通信環境が短期間で進化する現代において、地域資料を捉え直すとともに、大都市であり、日本の首都という性格を持つ東京という地域だからこそその地域資料サービスには、どのようなものが考え得るか、今後取り組むべき地域資料サービスの在り方についてお話いただきます。」とあります。公共図書館が主にはなりますが、大学図書館、専門図書館、学校図書館も、当然それぞれ資料をお持ちなわけで、その所蔵資料が幅広いことも東京ならではのことで、各館種についても言及するという事になっています。

各館種の話はそれぞれのパートに織り込むとしまして、今日の章立てで申しますと、ものすごく単純に、情報通信環境の変化、地域資料の捉え方、などを主題にします。

東京というお題は事務局の方がお考えいただいたものです。僕としては、なるほど、面白いな、ちょっと頭を使ってみようかなと思って賛成したんですけども、なかなか大変であります。でも、すごく僕は面白いなと思っています。東京という大都市で地域資料をもう一回考えてみようってこと、すごく面白いなと思って、こういう単純な構成にしています。

図書館の“拡大”を支えた社会状況の変化

- ・社会構造の変化
 - ・地域自体の生き残り事態に苦闘する状況（林ほか編(2010)）（小山(2015)）
 - ・900あまりの自治体の消滅・地方の無人化と都市の高齢化（増田(2014)）
 - ・戦後の日本社会を支えてきた構造（「後援の災」）の不可逆の変化を指摘（小藤(2019)）
 - ・今後は“縮小社会”を前提にこれまでは経済成長を背景に仕組みを拡充
- ・資料認識の深化
 - ・マンガ・動画資料：映画／テレビ／動画
 - ・空間自体の情報化：建築／地域／地球／宇宙空間
 - ・人間の情報行動
- ・災害の多発
 - ・阪神淡路大震災・東日本大震災の衝撃：地域自体の消滅を改めて経験
 - ・復興過程における地域資料の重要性の指摘
 - ・「平常時の課題」の指摘：自治体史資料でも流出・消滅の危機にある
- ・地域の情報プールの消滅+対象の認識の拡大+集積の危機の再認識

これもいろんなところでお話ししているスライドそのままなので、御存じの方は御存じのことだと思いますが、この話も、別に僕だけじゃなくて、何人かの人々が似たようなことをされていますし、しゃべり出した時期をいろいろ考えると、平田オリザが、『下り坂をそろそろと下る』（講談社現代新書 2016）とか言い出していた頃であったと思うんです。

今から思えば、平田オリザがそういうことを言い出したときだし、僕自身もこういうお話を講演の枕にするようになって、しばらくたちました。社会構造自体はぐっと変わっています。地域資料ということでは、地域にあった情報のプールの底が抜けたということです。

地域の大きいおうち、お寺とかに地域資料はありますし、近代以降のものでも、そういうところに集中したりするわけですが、そういうところがかなり機能不全になっていることは、皆さんご承知のとおりだと思います。敗戦と高度成長とバブルと低成長によって、日本の地域社会

は、近世以来の地域社会、別に中世からとは言いません、近世半ば以来、関東だと18世紀後半からの地域社会が、大体解体したというふうに認識できると思います。

一方、我々って欲張りですから、資料認識が深化するわけです。項目の1行目、「マンガ・動画資料：映画／テレビ／動画」のようなものは、取り組んでいるかどうかはともかくとして、図書館資料の範囲ですね。次の2行目「空間自体の情報化：建築／地域／地球／宇宙空間」、3行目「人間の情報行動」ですけども、今もう本当、この5年、10年で急速に、データが取れるようになりましたね。「人間の情報行動」、今までもずっと蓄積されていたんですが、コロナ禍で我々、意識するようになったと思います。

もう4、5年前なので、忘れている人もいると思いますが、コロナ禍で外出自粛が厳しく要請された時期、どこそこの交差点の人出がどれくらいだったみたいな話、スマホの位置情報を解析した情報な訳です。それによって、我々はどう行動するかを決めていた訳です。ということで、実はそういう資料、どこまで残せるかどうかはともかく、人間社会に大きな影響を与えた資料だと思います。

また、災害の多発も課題です。実は来週、和歌山大学に集中講義に行くことになっていたんですが、台風が予想されることから、全部遠隔ということになりました。和歌山に行って、向こうの方と議論するのが集中講義の楽しみであったんです。これも統計ではっきり出ていますけれども、明らかに温暖化の影響で、大きな水害、毎年どこかでは起きますよね。もうこれから頻繁に起きざるを得ないわけです。

そういうことで、毎年のように水害対策を考えないといけません。それから何よりも、地震ですよね。戦後しばらくの間、1948年の福井地震があった後、都市型の巨大な地震はあんまりなかったわけですが、1995年に阪神・淡路大震

災があり、2011年に東日本大震災があつて。そういえば、今年はお盆のときに1週間ぐらい社会的には制約がかかりましたけれども、南海トラフ地震があり得るんじゃないかという話がありましたⁱ。

また、東南海と関東と、何十年間単位で見たときには連動して起きるということは明確で、これは避けられないことですね。災害の多発期に入っているというふうに考えなければいけません。

このように、社会状況がかなり変わってきているというのを、念のため冒頭に申し置かせておきたいと思います。もちろん普段から意識されていると思うんです。でもこういう社会状況の変化の最中にあるということを考えていただきながら、情報環境のお話に入っていきたいと思います。

「個人向けデジタル化資料送信サービス」の衝撃

- ・国会図書館デジタルコレクションの新機能
 - ・図書館送信対象資料の多くが個人の手許まで
 - ・国会図書館のIDがあれば、約264万点の資料がいつでもアクセス可能に
 - ・特に雑誌(除商業雑誌)の調査に威力
 - ・これらの資料については全文テキスト検索も可能
- ・さらにオンライン資料(電子書籍・電子雑誌)の収集範囲拡大
 - ・有償やDRM(技術的制限手段)付き資料も、2023年1月から収集開始
 - ・https://www.ndl.go.jp/jp/news/ty2022/220526_01.html
- ・国会図書館が日本語書籍の事実上のプラットフォームに
 - ・学術情報系のプラットフォームやKindleなどの商用プラットフォームと組み合わせれば、かなりの書籍・雑誌情報へのアクセスが可能に
 - ・では、個々の図書館は今後どのような戦略を取るべきか?

所与の条件としてのジャパンサーチ

- ・2020年8月に正式公開された「我が国の幅広い分野のデジタルアーカイブと連携し、多様なコンテンツをまとめて検索・閲覧・活用できるプラットフォーム」
- ・ここへの対応を行えば、他の様々な統合システムへのデータ連携が容易に
- ・今後は、地域や分野の「つなぎ役」の充実が重要に



こちらのスライドも今さらだろうと思います。主張したいのは最後の点です。現在の国会図書館は、国民に対する直接サービスを本当に展開するようになりました。

私、高知の出身でしたしずっと西日本にいたんで、国会図書館で調査するのは大変だったんです。そのうちに、「デジタルコレクション」ができ、何やらができ、どんどん充実してきたのをずっと見てきました。調査する人間として、あの意義をしみじみと分かっている一人だと思います。同じ日本国民なのに、わざわざ泊まりがけで永田町まで行かないといけなかったのが、居ながらにしてかなりの調査が可能になりました。もちろん年齢制限や海外への制限があったりして、改善すべきところはあると思います。でも、日本の書籍の事実上のプラットフォームの一つになったわけですね。Kindleとかああいふもの以上の重要な一つになったということです。

もちろん今流通している本は見られないわけで、非流通資料に限っているという説明になっています。しかし、学術情報系のプラットフォームと、Kindleとか電子書籍の幾つかのプラットフォームと組み合わせれば、かなりの書籍や雑誌について、もちろん有料の部分もかなりありますけれども、アクセスが可能にはなりつつあるということですよね。では、この状況を前提に個々の図書館はどういう戦略を取ったらいいいのかということは、考えていかないとはいけません。

もう一個、環境の変化ということで、もちろん「ジャパンサーチ」ということになろうかと思っています。ジャパンサーチは、正式公開は4年前の2020年8月ですが、しばらく前から仮公開されていて、図書館も含めて、日本国内の日本に關係するデジタルアーカイブがかなり探せるようになりました。日本国内の海外に關係するデジタルアーカイブが入らなかったりとか課

題はありますが、とにかく今のところ、かなり充実してしまっていて、260 ぐらいのデジタルアーカイブが横断検索できるようになってきたという状況です。

要するに、書籍系のプラットフォームとデジタルアーカイブ、どこをスタート地点にするかというのを間違わなければ、実はかなりの情報にたどり着ける環境を、我々は獲得しているという状況にあるということになります。

それを支えている発想の一つが、オープンデータという議論でして、これも政策的には 2017 年にできたものを、今、デジタル庁とかが引き継いで、政府情報を使いやすい形でしっかり出すということで、やっている状況です。

オープンデータ

- オープンデータの定義
 - ・「オープンデータ基本指針」(高度情報通信ネットワーク社会推進戦略本部・官民データ活用推進戦略会議決定:2017年5月30日)
 - ・二次利用が可能な利用ルールで公開
 - ・機械判読に適したデータ形式
 - ・無償で利用できるもの
- キーワード
 - ・ 二次利用
 - ・ オープンデータの5つ星
 - ・ クリエイティブ・コモンズ・ライセンス
 - ・ 機械判読
- 即時オープンアクセスの議論へ

オープンデータのための5つ星スキーム
<https://5stardata.info/ja/>

皆さんもそれぞれの現場で、デジタル庁のオープンデータの政策とか、絡んでおられる方もいらっしゃるかもしれませんが、とにかく、まずは行政が持っているデータ、この中で、特に個人情報とか制限情報とかが入っていないものは、なるべくがコンピュータが再利用できるような形で公開することによって、行政ができる以上のことを、行政以外の方々にいろいろ関わってもらおうということで始まっている、もともとは一種の運動、ムーブメントです。

今のインターネットの世界をつくったひとりと言われている、ティム・バーナーズ＝リーが提唱しているオープンデータ運動が日本に入ってきて、日本では、デジタル庁の所管で、とに

かくデータを公開していきましようということになり、動いているということになります。

次にキーワードのところ。「オープンデータの5つ星」は、ホテルの等級みたいに、星が多いほど等級が上がっていくという考え方です。ここで強調したいのはどんなファイルやデータの形式でも、オープンに使えます、再利用できますというライセンスがつくことが、オープンデータの基本となるという点です。

現在、あまり可読性がなかった写真とか、テキストが入っていない PDF とかでも、大体コンピュータが読めるようになりつつありますよね。ということで、オープンなライセンスでデータセットを公開しておくことで、誰かがどこかで使えるでしょうと。もしくは使ってもらように働きかけていこうというのが、オープンデータの考え方ということになります。

2023 年の G7 広島サミットの目玉の一つが、AI とかデータの分野になります。これを日本が積極的に主導したわけです。そのときに大きなキーワードになったのは、オープンサイエンスということになります。G7 の中で、アメリカはアメリカで考えていることがあるし、ヨーロッパはアメリカのやり方は嫌なんですよ。日本はかなりアメリカ寄りのポジションではあるんですが、そこは間を取り持って、今、AI 規制の話とかも、議論も進んでいますけれども、どこまでどう規制するかは別にして、ルール化をしようということをやっていたりします。

例えば AI にデータを食べてもらうのも、オープンなライセンスがついているデータは食べてもらってよい、という理解をします。その上で何が生み出されているかは別にして、だから、ここまではいいよ、ここまではいけないよというのをうまく取り決めていくということ、世界的な議論をして、それを受けて、大学として、研究成果の即時オープンアクセスということで、今まさに政策が展開されています。個人的には

もうちょっと継続的に議論を進めていって、二次利用に関する考え方とかがもうちょっと入るといいな、とは考えています。

で、周辺環境の変化ですね。これも忘れがちというか、僕自身も忘れてしまいがちになりますが、2020年のこの時期も、まだ図書館の閉館が長引いたりしていましたよね。一時期は88%、9割の公立図書館が閉館する。大学図書館もほぼ閉館でしたよね。やっぱり学校教育、社会教育、調査研究、社会活動全体に大きなダメージがあったわけです。

このときに、大学、学校、公立、専門問わず、いろんな形で皆さん議論されて、行政の予算とかうまく使ったりして、電子図書館を導入されたりした状況であるというふうに思います。それ以前に比べれば一定程度は普及したというのが、データから出て来ますよね。この間にいろいろ制度の変化もありました。もちろんその前からずっと準備されていたことではあったりしますけれども、でも、コロナ禍によって急速にタイムスケジュールが早まったのは確かだと思います。先ほどの国会図書館の取組が変わったのもそうです。準備は当然行っていたらうけれども、この機会にやっつけてしまおうというところがありました。

また、2022年に大規模な博物館法改正がありました。博物館法ができて以来の大規模な改正をしました。ポイントが3つぐらいあります。そのうちの1つは、デジタルアーカイブが博物館の業務の中に位置づけられたということです。

もちろん全部の博物館が走り出しているわけではないのですが、幾つかの博物館は、じゃあ業務にするとしたらどうするのと、それぞれ取組が進んでいます。法改正はやはり大きくて、取組が加速したわけです。

それから、今、国の公文書は、紙とデータがある場合は電子を正本として扱います。これは

法改正を伴わずに、政令とかの改正でやりましたけれども、地方自治体にいずれ下りてきます。場合によっては古い公文書を管理されている図書館もあると思いますが、まだ古いのはいいんですけれども、新しい公文書ですね。それをどう管理して、どう長持ちさせるかみたいな議論が、多分これから始まるのかなという気がします。

ということで、ざっくりですけれども、周辺環境が、いろいろ変わっているということを申しました。

周辺環境の変化

- ・2020年2月からいまでのコロナ禍での状況
 - ・一時期は日本の公立図書館の88%が閉館／大学図書館もほとんどが閉館
 - ・学校教育・社会教育・調査研究に大きなダメージ
 - ・一方、電子書籍の一定の普及 → 図書館運営の議論がもっとあってもよい？
- ・この間の諸制度の変化
 - ・図書館：国会図書館による絶版等資料の個人送信の開始
 - ・博物館：博物館法が制定以来の大幅な改訂：デジタルアーカイブが博物館の業務に
 - ・公文書：国の公文書の正本は原則デジタルに

次はいよいよ地域資料の捉え方ですね。まずは一般論の範囲で地域資料のお話をして、これぐらい広がっていますよねというお話をしていきます。

現在の焦点：対象コンテンツの拡大

- ・動画資料
 - ・映画／テレビ／動画
- ・オープンデジタルの論文・書籍・情報
 - ・電子ジャーナル／電子書籍／統計資料
- ・空間自体の情報化
 - ・建築／地域／地球／宇宙空間
 - ・東京都デジタルツイン実現プロジェクト(2021) → GovTech東京(2023)
- ・人間の情報行動の集積
 - ・位置情報
 - ・情報収集行動
- ・→文化遺産のデジタル化という出発点から、オープンデジタル資料やデータ類へのアプローチの弱さをどう位置づけるか

もちろん東京で地域資料のお話をするわけですから、念頭には三多摩の研究会のテキストⁱⁱがあります。僕も本当によく勉強させてもらいましたし、アーカイブ分野でもあれば読むべき文献ということで位置づけられています。それか

ら、蛭田さん編で3冊の書籍が出ていますⁱⁱⁱが、これらを踏まえて、どういう地域資料があるのかということを少し考えていきたいと思います。

1つ目の「動画資料」はいいとして、2つ目、「ボーンデジタルの論文・書籍・情報」。これ、なかなか、どこがどうするかというのは難しい課題だと存じます。例えば統計資料が紙の統計書じゃなくなって、PDF だったりが多いかもしれませんが、さすがにそろそろ CSV にほぼ切り替わっていくと思います。

そのファイル、取りあえず今は原課でためていっていますけれども、行政のウェブサイトのシステム、データを消していくじゃないですか。そのこと自体をどうにかすべきだと思うんですが、あの元データの管理も実はちょっと怖いですよ。多分、皆さん、御自身の属している組織のことを考えていただくと、ちょっと怖いと思われると思うんです。あそこをどうするかですよ。

図書館としては、紙の統計書を今まで集めているわけですから、今後はデータで集めていくのだと思うんです。例えば今、統計資料と言いましたけれども、静岡県がやって、埼玉県もやったんですかね。県立の図書館が、県内の各市町村のウェブサイトにもぶら下がっている PDF を自動的に集めています。これは技術的にはできますので、PDF ファイルをだーっとかき集めてきて、取りあえず県立で運営しましょうということで、今やっています。

ああいうことが図書館のメニューの標準になっていき、そのときに CSV ファイルも一緒に集めておくとか、そういうふうなことが考えられてもいいのかなと考えます。

ウェブサイトも取りあえず国会図書館が WARP で集めていますけれども、WARP も情報を取得する間隔が長いのですよね。これとインターネットアーカイブを足せばどうかなるような気がするんですが、インターネットアーカ

イブは、深い階層はあんまり拾えません。ですので、自治体というか、公立図書館でも責任を持って、ウェブサイトの収集については何らかの検討をしておいてもいいのかもしれないなという気がします。

それから、先ほどお話した空間自体の情報化ですね。東京都知事の小池さんが任用した副知事のお一人に、宮坂さんという方がいらっしゃいます。宮坂さんはヤフージャパンの以前の社長さんですね。この宮坂副知事、様々なことに熱心に取り組まれています、そのうちのひとつとして、東京をデジタル空間上に再現して、そこにリアルタイムで情報を流す仕組みを構築されています。

そうすると、災害のときの予測とか、物流の制御とか、人流の制御とかをどういうふうにしたらいいかみたいなものが、実験的にできるわけですよ。これは、ほかの自治体でも、東京を見習っていろいろ進めているわけです。

その上、独立した組織として GovTech 東京^{iv}という財団法人を立ち上げて、宮坂さんが副知事をやりながらこっちも率いて、どうしても都の業務で手を伸ばせない範囲のことを、もしくは、もっと機動性を持ってやりたいことをやっていくという形になっています。

これもいろんな講演でお話ししているんですが、この都のデジタルツインの担当の方とかとお話する機会があったときに、例えば、日々データ更新されていくんですけども、古めのデータはどうされるか聞いたら、それはあまりお考えじゃないんです。でも、現場はそうだろうと思うんです、今のデータでシミュレーションすることが大事だから。

けれども、東京都の情報が、こんなに集まっていることはないだろうと思うんです。もちろんデータ量は、それなりに大きいので、別に毎日データを取る必要はなく、適宜収集するだけでも意味があるかもしれません。

それから、従来からあるコンテンツでも大きな変化があります。一つは、昔から図書館が得意にしている写真です。例えば関西だと「北摂アーカイブス」。箕面市と豊中市、2つの市の図書館が合同でもともと始めておられて、今は地域フォトエディターという、住民の方々を主軸に日々の活動されたりしています。そこで地域の写真を集め、同時に今の状況も撮影して、蓄積していこうという活動をされています。

「北摂アーカイブス」は古くから活動されています。そして改めて今、技術も進んで、いろいろ手軽にできるようになったということがあって、非常に写真が注目されています。



ちょっと小さいですけども、このスライドの上の左、これを自動色づけすると、右上のこれ、何となく手前に御家族が写っていて、お膳があって、奥にどうも川らしきものがあるって何かきらきらしています。

この奥の建物は、皆さんが絶対に知っている建物です。これは掛け値なく大丈夫です。絶対知っています、多くの方が。何でしょう。これは、今の原爆ドームです。当時は広島市の産業奨励館なわけですね。

まだまだ、原爆が落ちる数年前なので、きらきら電飾があって、川があって。そうすると、ほとんどの方が気づいたと思うんですが、これ、今、平和公園にあるところに建っていた建物で撮影したということになります。あの場所は、

アニメとかでも御覧になった人がいるかもしれませんが。当たり前ですけども、広島のだ真ん中の中州なんで、街なんです。あそこは繁華街なんです。

繁華街の真上に原爆が落ちて、戦後の再開発をするときに公園として残した場所ということです。僕は一応、近代史だったんで、ここまで鮮やかじゃないですけども、左側の白黒を見たって、何となく情報を読み取ろうと思ったら読み取れるんです。だけれども、やっぱり右のカラーにしたほうがよく理解できるかと。産業奨励館のきらきら感とか。要するに実感できるかどうか重要です。

白黒写真を実はかなりの程度カラー化できて、それを聞き取りしながら修正するという活動を、庭田杏珠さんという方が、高校生のときからずっとおやりになっていて、今、社会人1年目ですけれども、例えばこういう形で、広島の記憶をもう一回呼び起こしていこうという活動をされています。

下側の2つ、これは京都です。こっちは元からカラーです。もう既に、コダックのすごいいいカメラで、いいフィルムがあるのです。広報用の写真とかは、白黒で雑誌などに印刷するために、白黒写真で撮ったほうがいいんです。けれど、スナップ写真はカラーでかなり撮影しています。右は1950年ぐらいの京都の新京極の場所。左は川端三条のちょっと東に行ったところで、この建物もまだあるんです。アメリカの占領軍スタッフが撮っていたフィルムが、その方々が亡くなって、子供も亡くなって、孫がオークションに出したりするという。子供は大体、両親のものは取っておくんですが、もう1世代進むと大体手放すんです。

ネットオークションに、十数年ぐらい前から、実は大量に日本のカラー写真が出回るようになって、一部国会図書館に寄贈されて入れたりしましたけれども、衣川太一さんという方が、ま

だまだ初期の段階で入手されて、大量の日本各地の写真を持っておられます。

彼と一緒にプロジェクトを組んで、京都の博物館とかで、研究者 20 人ぐらいが、僕はアーカイブの立場でしたけれども、現象学の人とか、博物館の人とか、近代史の人とか、民俗学の人とか、いろんな人が集まって、「戦後京都の「色」はアメリカにあった！」という展示とかもしたりしています。

写真は非常にキャッチーなので、もっと、がんがん使っていればいいと考えます。ただ、著作権とか、肖像権はやっぱり気になるわけですね。この点、3 年半ぐらいになりますけれども、「肖像権ガイドライン」というのを、デジタルアーカイブ学会がつくっています。

もちろんガイドラインなので、そのまま適用するということではないのですが、これを基にして、例えば関西だと朝日放送、テレビ朝日系の関西の放送局が、阪神・淡路大震災のときの取材のフィルムをそのまま、大量に公開しています。何千本と出していて、阪神・淡路大震災の本当にいろんな状況が動画で見ることができます。その公開のときのチェックに、肖像権ガイドラインを使っています。ほかにも日々類例が増えていっています。

もちろん地域の状況とか、例えば学校だったら学校の状況とか、専門図書館だったら団体の状況とか、いろいろあるかと思うんです。一応このガイドラインを基にいろいろやっていただいて、今のところ、大きな事故は起きていないので、写真の公開で悩んでおられたら一度御確認いただいて、デジタルアーカイブ学会とかに助言を求めることは可能だろうというふうには思います。

次はテキスト技術のほうですね。これを地域資料のどこに位置づけるかということがありますが、急速に今、いろいろテキストが蓄積され

ているという状態なんです。

いろんなところでテキストが、実は大量に蓄積しています。このような状況をどういうふうな幅で考えたらいいのかということは、考えていけないといけないだろうと思います。もちろん e メールとかもそういうことです。全部集められるというのは無理だと思います。ただ、そういう視野の持ち方は必要かなと思います。

テキスト技術をめぐって

- ・くずし字認識
 - ・国語データベース等によるデータ集積：画像認識技術・学習データ
 - ・くずし字認識アプリ「みそ(Miso)」などの開発
 - ・学習データの拡充が課題：原本等に留まっている側面も
- ・テキストの構造化
 - ・TEI(Text Encoding Initiative)：テキストの構造とメタ情報を記述
 - ・近世ヨーロッパ史における帳簿分析／延喜式への応用(小笠、後藤2019)
- ・市民参加型
 - ・江戸料理レシピデータセット
 - ・古奥籍からレシピをオープンデータで公開：クックパッドとの連携
 - ・みんなで知蔵
 - ・クラウドソーシングによる史料鑑別・推定
 - ・2017年に京都大学古地図研究会で開始
 - ・その後国立歴史民俗博物館、東京大学地震研究所が参加
 - ・現在、3800万文字を突破 → 福井県文書館の参加
- ・災害研究の深化(加納ほか2021)
 - ・限られた古記録から大量の資料を対象に
 - ・史料批判の手続き

それから 3D データです。これも、後でもうちょっと別の角度から見ます。

画像・3Dデータの現状

- ・IIIF(International Image Interoperability Framework)
 - ・画像へのアクセスを標準化し相互運用性を確保する仕組み
 - ・デジタルアーカイブでの画像公開の条件になりつつある
- ・フォトグラメトリ
 - ・大量の写真を組み合わせることで 3D データを作成：比較的簡易な環境で可能
 - ・ノートルダム大聖堂のデジタル的な復元
 - ・フランス国立図書館リシュリュー館の天井画
- ・石造物 3D アーカイブ
- ・3次元計測データの作成・運用
 - ・考古学分野における実践(野口2022)
 - ・Extended Reality/Cross Realityの世界へ：XRミートアップ奈良文化財×XR

それから、市民による活動ということで、高知県の事例を取り上げます。中心になっているのは、『高知新聞』という地方紙の記者さんなんです(当時)。30 代の若い方なのですが、彼だけではなくて、リタイアされた方とか、大学の先生とか、もちろん今お仕事されている方とかも一緒にされています。

高知県西部の四万十町を舞台に、ともかく地

名を調べて、しかもかなりレベルの高い調査をして、それをウェブ上に展開している。

それが、単なるホームページの展開だけじゃなくて、さっきのオープンデータです。河川台帳、これは手書きのものだったらしいですけども、県が持っていた河川台帳から情報を CSV 化して、川の名前とか、橋とかいろいろありますよね。それをオープンデータで、かつ、CSV と PDF でオープンデータのライセンスつけて公開している。地図にいろんな情報を落とし込んでおられる。

個人の土地のものとか、地域のお寺でお持ちのもので、ウェブで公開しているんだけど、制限をつけて、誰でもが見られないようにしているものももちろんあるんです。これは博物館分野では常識なんですけど、現物の管理があやうい資料に関する情報は、あんまり出さないということになっていて、そういうルールを守りながらやられているということです。

市民による活動：高知県の事例

- ・ 四万十町地名辞典
 - ・ 歴史文化情報を公開
 - ・ 高知県河川台帳から情報を CSV 化、PDF 化してオープンデータで公開
 - ・ 地域資源地図の作成
- ・ 高知地域資料保存ネットワーク
 - ・ GIS による「可視化」で資料のフォローができるデータベースを構築
 - ・ 災害時の資料レスキューのトリアージ
 - ・ 学校資料の保全にも
- ・ 市民科学による地域文化資源の「記録」
 - ・ このような活動とどう連携を作るか？

それと連動して、「高知地域資料保存ネットワーク」というのが展開されています。これはもうちょっとプラットフォームが合理的で、GIS、地理空間情報によって可視化をして、資料がどういう状態に置かれているかというのをフォローできるようなデータベース、実は高知で民間の方々がつくっています。高知も人口 60 万人台なんです。世田谷区とかより人口が少ないわけですね。

僕自身も高知出身なのでですけども、高知は

限界集落という名前が生まれた場所として、超高齢化社会なんです。超高齢化の中で、要するに、場所によっては集落自体が消滅する状況が生まれてきているんです。東京だって多摩のほうはそうなっていますが、高知は高知市中心部をのぞくほぼ全県がそういう状態です。だから、資料をどうにか、把握していかないといけない。

もう一個、南海地震が来たときには、人が住んでいる場所のかなりの部分が、津波に遭うことになっているわけです。そうすると、災害が来る前に資料を逃しとくのがいいんですが、そういうことが及ばない場合には、とにかく、今、取りあえず情報を集積しておいて、災害があったときに、その情報に基づいて、資料のレスキューを行うことになります。

このレスキュー、都立図書館さんは、東日本大震災のときに岩手県陸前高田市の資料を修復されています。そして現在も様々な団体が能登でずっと継続的にやっています。とにかくまず資料を助け出すところからですが、できる準備をしておこうということです。

中心になっている方は、市民科学による地域文化資源の記録だと位置付けられているわけです。こういう活動って、多分東京のいろんなところでやっています。実際に御自身の関係されている図書館で、そういう方と連携されている方もいらっしゃるかもしれません。

例えばそういう団体の存在を知っておいて、いざ何かあれば、大事な資料は一緒に保存できませんかとかというお話ができたほうがいいんだろうというふうに思います。

高知県の場合、連携の動きはこれからかなあ、と存じます。今は市民活動ということでやっているという状況になっています。

次に参ります。デジタルアーカイブというのが本当に爆発的に増えています。しかし、デジ

タルアーカイブも、管理する人がいなくなると駄目になるんですよね。早期に作った東大とか京大では、研究室が消滅すると、データがなくなったりする場合があります。そういう議論を以前からしていて、もう数年前には、東京大学の総合図書館とかは、昔あったデジタルアーカイブを再度復活させるとかいう形で、もう一度閲覧可能な形にしたり、そういう活動もされていらっしゃる。要するに、これはウェブ上の資源の一部だと思うんです。そういうのに対してどういうふうに取り組んでいくのかというのが、これも一般論としてはすごく課題だろうというふうに思います。

2010年代以降の状況

- ・アーカイブ／デジタルアーカイブの試みの〈沿革〉
 - ・ 1995と2011のインパクト：被災写真資料への注目／アーカイブに「現在を記録する」意味が
- ・ 現在に繋がるデジタルアーカイブの考え方の確立
 - ・ 東寺百合文書WEBの登場(2014)：国定資料の一歩公開／ダウンロード可／CC BYによる利用
 - ・ 利活用への大きなシフト(古賀(2017))
 - ・ 現在も各地での構築が日々行われている
- ・ デジタルヒューマンティーズの展開
 - ・ 歴史学分野での進展(後藤・橋本(2019))により理論的・実践的に一定のまとまりが見えている段階
- ・ 統合／横断の動き
 - ・ 組織内：京の記憶アーカイブ(2015)／東京大学学術資源等アーカイブズポータル(2019)／Keio Object Hub(2021)
 - ・ 組織外：越後佐渡デジタルライブラリー(2011)／群馬県立図書館デジタルライブラリー(2021)
- ・ →基盤技術の変化や制度整備を背景に、1990年代の構想が実現し得る状況に

そういう中で、山形大学が、民間企業として資料保存活動している AMANE さんという会社と一緒に、授業実践されています。学生が持っているスマホのカメラロールに入っている写真、でも写真だけじゃなくて、LINE なり SNS などの、テキストのやり取りも地域資料だと思うんですけれども、とにかくスマホの中に地域資料が入っているでしょうという話を授業でして、学生が街なかで撮った写真を、授業で展開するなんていう活動をしているわけです。

当たり前の話といえば当たり前の話ですが、先ほどお見せしたように、写真が注目されているのは、写真はやっぱりインパクトが違うんです。もちろん我々図書館関係者は文字好きの集団ですが、図版があったりとか写真があれば、読みやすいというふうに思ったりとか、もしくは

は、文字の世界で想像はしていきますけれども、写真から得られる情報も、それはそれで多い訳です。

一般的にはやっぱり写真とか動画も情報源として非常に重要ですし、引きつけることは確かですよね。大学とか博物館でイベントとかやると、写真系のイベントって皆さん、非常に関心を持ちます。地域の写真を集めてみようとか、写真を読み解いてみようとか、盛り上がったりするわけですよね。我々はその素材を、山のよう日々蓄積しているのです。これを、じゃあ、どういうふうに考えていくのか。

ともかく、手持ちのスマホやデバイスのなかに、地域の情報とか生きている人の情報って、多分驚くほどあるんです。もちろんこのデータも全部集められるのは無理だと思います。だけれども、そういうデータは以前に比べると非常に手軽に、大量に撮れていて、分析のしがいもあるんだと思います。実際、写真データの分析とかで、大量に集めてきて分析するというのが今行われています。

写真を収集するということは同時に、個人と出会うということだろうと思います。これも論稿というか、研究ノートみたいなものを書いたことがある写真です。この写真、どの場所の写真だと思いますか？



【参加者】アジア圏の。

【福島】アジア圏、いいですね。年代、どれぐらい。西暦で、ざっくりでいいです。1900？

【参加者】30年。

【福島】1930年、アジア圏。いいですね。それでは真ん中にある賢げな赤ん坊、ちょっと見てほしいんです。

実はこれ、1973年の9月、だから、今から51年前に、徳島県の祖谷で撮影された動画を一部、静止画で出したやつなんです。写っているのは私と私の親戚たちなんです。

で、これは何かというと、大阪の吹田市にある国立民族学博物館、今話題の万博の前の万博の跡地に、梅棹忠夫という文化人類学者が構想して造った博物館です。

梅棹たちがこの博物館を構想したときに世界中の地域の映像を集めていきます。徳島の祖谷という山奥、この山奥の人たちも、要するに彼らにとって研究対象なんです。一般の日本人と違う人たちというか、特殊なお祭りをやったりする人たちで、それはどこだって特殊だと思いますけれども、研究対象ということで、テレビ局が取材したフィルムを、民博が収集しました。

梅棹はともかく、メディアを先進的に取り入れることで有名な人でしたので、博物館ができたときから、ビデオをたくさん見られる仕組みをつくっているんです。世界中から集めたフィルムの一つにこれがあって、僕は、大学1年生の研究室の旅行で初めて行ったときに、自分の父方の田舎の、ドンピシャの秋祭りだったので映像を見たら、明らかに父が映っていました。

実は、この映像に写っている人たちは、民博で公開されていることを誰も知りませんでした。この映像データをくれと言ったら、写っている人が申し出ることは想定されていなかったです。研究利用じゃないと映像をいただけないのですね。

民博って、日本で最高水準の研究機関で、最高水準の博物館です。だけれども、まさか資料映像の当事者と対話すると思っていなかった。結局、研究利用ということで、僕はデータももらって、民博のシンポジウムでしゃべらせてもらって、民博の紀要に書くことで、一応、研究利用という形にしました。

申したいのは、いろんなデータを集めていくと、多分当事者と出会います。もちろん今までもそうだったと思うのです。地域資料もらってくるときとか、写真を展開するときに、当事者に出会っているのですけれども、当事者と出会ったときに、どういうふうに情報を共有するか、どういうふうな会話をするのかというのを考えておいてほしいと考えます。

ともかく、我々が地域資料の幅を広げていくということは、こういう存在と出会うということを考えていきたいと存じます。

それで「東京という巨大都市」ということになります。

人、物、流通と、メディアの存在による都市意識の形成みたいなのがよく議論されますが、東京の場合は世界でまれに見る巨大都市なので、情報発信の主体や拠点がいろんなところにある。渋谷とか池袋、それだけで通常の都市だったら十分に大きなひとつの都市であるものを複数含み込んでいるということが、一つの特徴だと思います。

都市構造の把握

・微分化の方向

- ・近世都市研究に起源
- ・三都の分析から出発／複雑な権利関係と社会集団の重層
- ・近代にも持ち越される
：近代化／震災／戦災／高度成長／バブルで大きな変容がある
- ・流入する人々と小集団の形成：同郷／信仰集団／同窓／サークル…
- ・多摩や島嶼部をはじめ、区部でも社会集団の重層は指摘できる
- ・→ということは？

・都市全体の把握

- ・ひとつものの流通
- ・メディアの存在による「都市意識の形成」
- ・複数の情報発信の主体や拠点

一方、微分化して都市構造を把握しようというのが、今の、歴史学や社会学のトレンドだと存じます。社会構造の議論をするときにも、もうちょっと微分化して考えましょうということがあったりしているわけです。

今だと、土地の権利もある程度集約されていると思いますけれども、昔はもっと、どの集団に人間が属するかとか、この店はどういうものを売り買いできるかというところで権利関係があって、社会集団が重層していたわけですが、たまたま京都がそれがまだ少し残っているんで、みんな京都はややこしいって思うわけです。でもこの点は、江戸でも大坂でも一緒です。あるいは、港町とか城下町でも一緒です。

誰々はここまでしか入れないとか、この集団でやり取りできるのはここまでだとか、この人はこの集団、同じ空間に住んでいるけれども、別の集団に属していて、違う対応をしなきゃいけないという状況ですね。

多分、古くから同じところにお住まいの方は、それを実感されているんじゃないかと思います。土地でも登記書に表れない権利関係がありますよね。

近代にもそれは当然持ち越されていて、近代化とか震災とか、戦災とか高度成長、バブルで、それぞれ大きな変容もあって、近世以来の空間に結びついた社会集団って、一応解体されているんですけれども、でも、ちょっと残っています。そして、都市に流入する人たちも、別に一気にバラバラに何十万という単位で流入したわけじゃなくて、同じ出身地同士で、都市内でネットワークをつくるんですよね。同郷者集団と言ったりします。

それから、信仰集団も大事です。例えば高度成長前ぐらい勢力を伸ばした新興宗教の団体がいくつかありますよね。あれは、都市に流れ込んだ人たちの頼る、寄る辺になっていたわけですね。あとは大学などの同窓があると。最大の

同窓集団の一つは多分、慶應の同窓会の三田会だったりするんだろと思いますが、例えばあいう同窓組織。あと、文化的な活動とかを通じたサークルとか、もちろん社会運動をする人たちとか、そういう形での、実は小集団が山のように折り重なっているというのが都市です。

もちろん、当たり前のことなのですが、多摩や島嶼部をはじめ、いろいろな場所でも社会的集団の重層はあります。そして各集団で情報とか、資料を蓄積したりしているのですよね。それをどういうふうに把握しているか。もちろんこれもまた、何回も言いますが、全部は多分無理なのです。

我々が学んでいる、蛭田さんなどの先駆者が、まちのエフェメラル的な資料を集めてみたりとか、という行為は、多分この都市の小集団をつかまえにしている行為なのです。こういうことをちょっと意識しながら、自治体の中とかでも、大学とかでもそうだと思うんですけれども、ご自身の守備範囲の中で、どうすればこういうことが出来るのかということを考えてみましょう。

学校に寄せると、学校資料の蓄積をもう一回しっかり調査して、学校資料を生き残らせているということが、この数年改めて強調されています。関西の有志を中心に京都に学校資料研究会というのができて。

学校って、近代以降の地域の情報が集まる場所ですよね。別にそこに所属している児童生徒だけじゃなくて、大人たちもかなり関わる。これも場所によりますけれども、大体、最初に学校を建てるのに、その地域のお金で建てたりするから、自分たちの権利意識があったりします。戦後に建った学校はともかく、戦前につくられた学校などはそうです。なので、いろんな活動があり、情報が集まったりするわけですね。

学校資料研究会では、もちろん児童の資料もやるのですが、PTAや部活動に関するものと

か、地域の資料もいろいろ考えなきゃいけないねということで活動されてます。京都でも東京でも学校の統合の議論は地域によっては起こるわけですよ。

そうしたときに、学校資料ってどうするのかということは、今までもそうだったんですが、これからますます重大になってくると思います。ほかの地域で始まった話が、東京に来るということだと思っていたらいいかなと思います。

学校資料の蓄積

- ・学校資料研究会
 - ・2017年から活動／関西の有志（学芸員・大学教員など）／初等中等教育を念頭
 - ・学校資料とは、学校に関するあらゆる資料のことです。学校にある（あった）ものに限らず、個人が所有する（していた）ものも含みます。
 - ・学校資料は、文書や公文書類、写真、教科書、考古資料、民俗資料、美術工芸品、教材教具、標本、児童・生徒の作品、P.T.A.や部活動に関するものまで、実に幅広いバリエーションがあります。
 - ・村野正景・和崎光太郎編『みんなで活かせる！学校資料——学校資料活用ハンドブック』（2019年3月発行、本文、正誤表）
 - ・『学校資料Q&A』（本文）
- ・全国大学史資料協議会
 - ・1996年結成／97機関が加盟
 - ・大学の歴史は個別大学史の枠にとどまるものではなく、他大学や社会との関連を視野に入れて編纂されるべきであり、大学に蓄積された資料は、（略）広く社会に公開・利用されるべきであると考えます。

大学ということであっても、大学資料の研究が30年ぐらい活動しています。大学でも、大学自体の情報がまずは大事ですけども、社会との関連の視野、大学に蓄積された資料は、社会に広く活用されなければいけないということで、大学資料協議会というのができて、いろいろ活動しています。各大学に資料館とか、展示室とかできたりしますけれども、状況が許さないところとかはどうしていくのか、ということが考えられると思います。

それから、ほかの都市でもないことはないんですけども、大都市東京の特徴というのと、演劇をはじめとする芸術活動の集中ってやっぱり大きいですね。日本の場合、どうしても東京集約、一極集中型なので。京都にも小劇場がたくさんありましたし、大阪にもあったんですけども、今、なかなか難しくなっています。そうして東京に集中してくる。資料も当然集まって

きます。

早稲田大学の演劇博物館がそのなかで、資料を集めつつ人材養成に取り組みました。みんなが知っているような劇場でも、実は資料が必ずしもしっかり管理されていないという現状があります。そのなかで、ドーナツプロジェクトということで人材養成を行っていました。演劇を残そうとしたとき、演技そのものは一回性のもので再現が不可能。だから真ん中は空洞。だけれども、周りの、講演の映像とか、脚本とか、ポスターとか、フライヤーとか、チケットとか、衣装とか、舞台装置の図とか、写真とか、そういうを集めることで、真ん中はどうしても再現不可能だけれども、周りの情報を集めることで、ドーナツの真ん中、ドーナツホールは見えるようになるわけですよ。

だからドーナツプロジェクトという言い方をして、なるべく演劇の記録を残していきましようというのが、3年前から始まっているというのが現状です。

芸術活動とその資料

- ・ドーナツプロジェクト（早稲田大学坪内博士記念演劇博物館）の活動
 - ・舞台芸術のアーカイブを「ドーナツ」と形容／演劇やダンスやパフォーマンスは、ドーナツホール／公演映像、戯曲、ポスターやフライヤー、チケット、衣装、舞台装置図、舞台写真、劇評など、その舞台に関連する資料をできる限り多く収集することで厚みのあるドーナツを
 - ・デジタル・アーカイブの構築と利活用を担うアートマネジメント人材の育成を目的とする連続講座がドーナツプロジェクト（文化庁「大学における文化芸術推進事業」「舞台公演記録のアーカイブ化のためのモデル形成事業」）
- ・小劇場
 - ・大都市独特の
 - ・自らアーカイブ形成を指向する／指向しない
 - ・情報の蓄積を忌避する面も
- ・タウン誌／エフエムラ
 - ・『週刊さちじょうじ』どの地域にもあった（ある）存在
 - ・京都府時代の「苦い」経験



次に小劇場です。小劇場の場合は、中心になる人がなくなると活動が終わる可能性もあったりします。あとは情報を意識して蓄積しているか。演劇は再現不可能性も大事なんで、痕跡を残したくないという人も、実はかなりいるんです。もしかしたら演劇がお好きな方はご存じかもしれませんが、映像を残すのも駄目という方がいらっしゃいますよね。

だけれども、図書館が文化的な資源を集める

場所だとすれば、こういうところも、いろいろ働きかけることは可能かもしれません。もちろん博物館とか、自治体周りとか、そういう演劇関係の担当とかと一緒にやることになりますが。

それから、タウン誌とかエフェメラですね。タウン誌は、僕自身は苦い経験があります。京都府立図書館に勤務していた時の話です。京都は、大学の町ですし、様々な社会活動も盛んなので、タウン誌がかなり出ていました。僕自身はちょうどタウン誌がなくなるぐらいで京都に住んだり仕事したりするようになったので、あんまり分かっていないのですが。でも、大学とかに積んでいたなという記憶はあります。ところが、京都府立図書館をはじめ、京都の公立図書館、タウン誌をきっちり集めていなかったんです。

寄贈されたものとかを、断片的に持っていたぐらいで、全然、実は集めていませんでした。こういう資料、個人の方や大学の教員がお持ちなんです。だから、それを大学図書に可能なら寄贈しておいてくださいなどとお話したりしました。最近、それぞれの地域でどういうタウン誌が出ているかを調べられる書籍なども出てるので、調べていただいて、所蔵をチェックするなり遡及して収集するなりを検討いただいても良いかもです。

例えば、直接の知り合いがいまやっているタウン誌に『週刊きちじょうじ』という50年ぐらいやっているものがあります。お父さんがやっていたのを息子さんが受け継いでおられます。受け継いだ方はデジタルの専門家で、今後はデジタル的な展開をするかもしれません。

ともかく、タウン誌は、戦後から現代の情報が詰まっている資料です。今までの地域資料論の中でも出てきますけれども、改めて重要だと考えます。東京はやはりタウン誌が多様に出て、今も僕の住んでいる周辺でもタウン誌的なもの、山のように出ています。なかなか集めるの大変

だろうなと思いながら見ていますけれども、チャレンジする意味はあると考えます。

あとエフェメラですね。例えば今日回覧しているのは、雑司ヶ谷と染井と谷中の霊園の地図です。

エフェメラ、地域資料の大事な中核だと思うんです。こういう公営墓地もお墓は維持できなくなって、なくなっていくので、長いスパンでもっておいたら、ちょっと意味があるかもしれません。

ともかく、タウン誌とかエフェメラとか、都市を象徴する資料だと思っています。墓地の案内で、こんな立派なもの、僕、東京以外で見たことないです。京都でも大阪でも、これはなかったです。しかも、東京都はお金があるんで、東京都の公園でも、墓地関連のところは、しっかり仕事しているなあ思って拝見していました。

市民運動資料／コミュニティミュージアムの役割

・市民アーカイブ多摩

- ・市民活動資料の蓄積
- ・市民活動資料には、団体が発行した会報やミニコミからチラシ、ビラ、ウェブ上の文書など
- ・草の根の市民の知恵や潜勢力によって支えられ創造されていることを気づかせてくれる、大切な源泉／「失敗」の記録から学ぶ
- ・専門の公的機関は存在しない／団体解散や担い手の高齢化によって散逸の危機

・戦災資料

- ・東京大空襲・戦災資料センター／2002年開館
- ・東京の空襲の歴史・体験を、大きな枠組みも意識しながら、できるだけ正確にしっかりと伝えていく。それを通じて、戦争や空襲の記憶の風化をふせぎ、過去の戦争を美化・正当化するような動きには反対し、戦争・空襲のない平和な社会をつくり、まもっていく

・コミュニティミュージアム

- ・多文化サービスと接続
- ・アイデンティティの確保／社会の多様性の担保 例) 高麗博物館

あと、市民運動資料ですね。これも大都市東京の特徴だろうと思います。もちろん各地域で市民運動の資料は残っていますけれども、今、東京空襲資料センターの会報とか回覧していますが、市民運動とか社会運動、やっぱり東京拠点でいろいろやっている場合が多い。

東京で始まったものが日本に広がっている場合が、それこそ1950年代、60年代、反核の運動って、杉並から全国に広まって、もちろん世界に広がって、世界の一つのムーブメントをつ

くったのは確かです。そういう運動が多数あり、
いろんな資料の蓄積がされています。

ただ、戦後初期から活動していた団体とかは、
担い手の高齢化や団体の解散とかによって、資
料自体が散逸の危機に直面しています。だけれ
ども、なかなか専門の公的機関が存在しない状
況です。

各地の博物館とかで努力して集めていたり
しているんです。ただ全然追いつかない。東京
都立公文書館が規模を何倍かにして、こういう
資料を持つのが筋なんですけれども、なかなか
そうはいかない。それを、例えば市民アーカイ
ブ多摩などの民間の団体が、とにかく集めてい
こうということをされています。

次は戦災資料です。大空襲・戦災資料センタ
ーが 1945 年の数ヶ月にわたる空襲をテーマに
資料を集めて、継承していくという活動をされ
ています。

こういう資料館も、例えば活動できているう
ちはいいと思うんです。その活動が上手くいか
なくなったときにどういうふうにしていけばい
いのか、ということを考えざるを得ない。もち
ろん上手く続く方がいいんです。それでも万一
の時にどうするかを考えておいたほうがいいで
す。

コミュニティミュージアムも、新しくできる
ところも増えてきました。大阪だと今、コリア
ンタウンに一ついいのができましたし、京都の
ウトロ地区というところに、再開発に伴って、
非常に優れた活動をしている記念館ができたり
しています。古くからやっているところは、市
民活動と同じようなことで、入れ替わりがあん
まり利かないので、多分だんだんなくなって
いく可能性があります。新宿にある高麗博物館さ
んなんかも、もちろん活発に活動されています
けれども、ちょっと長いスパンで見たら、今後
どうなるか注視が必要です。別にここだけに限
りませんが、ちょっとそういうことを考えてお

くべきかな、という感じがします。

以上、情報環境、地域資料、大都市東京とい
うお話しをしてきました。結論は古典的です。
私はコンテンツ志向の人だと自覚があります。
普段はデジタル、デジタルと言っていますが、
保守的というべきかもしれません。図書館では
資料と情報が何より大事と思っています。

図書館の役割は？

- ・古典的な結論
- ・「責任範囲」の情報と資料の所在
 - ・把握する／常に更新する
 - ・案内できる／連絡をつけられる
- ・ラストリゾートとしての役割
 - ・すべてを直接引き受ける必要はない
 - ・博物館など関係各所と協議しながら
 - ・デジタルでの代替の積極活用 → 環境整備が重要

そういう意味で、古典的な結論なのですが、
責任範囲の情報と資料の所在は常に把握し、そ
の情報を常に更新することが、図書館にとって
決定的に大事です。その資料を案内できたり、
所蔵者に連絡をつけられるということが、図書
館として大事なことだと思います。図書館は、
何のかんの言っても、市民から一番アクセスの
障壁が低い行政機関です。我々はその特性のた
めに、いろいろ現場で苦労したりするわけです
けれども、この障壁の低さが図書館の強みなの
で、そこが情報をもっていること、いろいろな
ところに接続できることが重要だと思います。

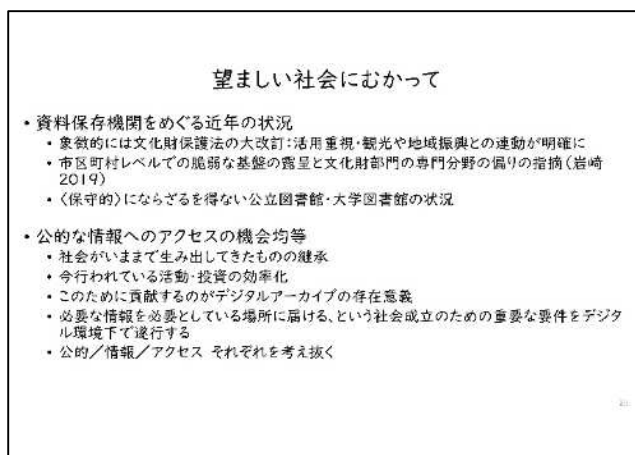
そして、資料と情報にとってのラストリゾ
ートとしての役割を果たすのだと思います。もち
ろん全てを引き受ける必要はないと思います。
今、別途図書館機能の再定置という議論をして
います。これは次の時代の構想みたいな話なの
で、今の現実にとどこまで沿っているかは別です。
この再定置の要点は、今の流通資料へのハンド
リングの手間を減らして、ユニークな資料や情
報のケアをしたほうがいいよねというものです。

それでも、全ての地域の資料を直接引き受ける必要はないし、できないと考えます。

関係各所と協議して役割分担をするのだと思います。その中で、お勧めしませんが、どうしても現物で残すのが難しいのならデジタルで代替するとかということも、踏み込んで考えることが必要です。資料と情報を長く保存できる環境整備をしながら、我々は大都市東京が生み出したいろんな資料をなるべく多く残して行きたいですね。今日並べたのも、まだごく一部だと思うんです。皆さんのほうが、もっといろいろ思いつかれていると思います。

なので、みんなで議論して、それぞれの観点で資料や情報を発見していきましょう。また個別で悩む必要はないので、こういう協議会で議論したり、大学にご相談いただくなどしていただければと思います。そして、私に限らず、図書館情報学の研究者にも、ぜひいろいろ文句や、

こういうこと考えてみたいなことを言っていたいでよいと思います。もしくはお金持てていいとか。



ということで、最後のスライドはもうよしとして、お話自体はここで終了にしたいと思います。85 分かかりました。どうも御清聴ありがとうございました。（拍手）

ⁱ 「南海トラフ地震臨時情報（巨大地震注意）に伴う政府としての特別な注意の呼びかけの終了について～令和 6 年 8 月 8 日 16 時 43 分頃の日向灘の地震について（第 8 報）及び南海トラフ地震関連解説情報（第 7 号）について～」

https://www.bousai.go.jp/pdf/240815_nankai.pdf

ⁱⁱ 『地域資料入門』（図書館員選書 14） 三多摩郷土資料研究会／編，根本 彰／[ほか]著 日本図書館協会 1999. 4

ⁱⁱⁱ 『地域資料サービスの実践』（JLA 図書館実践シリーズ 41）補訂版 蛭田 廣一／著 日本図書館協会 2023. 1

『地域資料サービスの展開』（JLA 図書館実践シリーズ 45） 蛭田 廣一／編 日本図書館協会 2021. 12

『地域資料のアーカイブ戦略』（JLA 図書館実践シリーズ 46） 蛭田 廣一／編 日本図書館協会 2021. 12

^{iv} 一般財団法人 GovTech 東京

<https://www.govtechtokyo.or.jp/>

^v 656, 390 人「高知県推計人口、人口動態及び推計世帯数（令和 6 年 9 月 1 日現在）」

<https://www.pref.kochi.lg.jp/doc/t-suikei/>